

アカデミック・ライティングのためのテンス・アスペクトの再学習

—図表の提示を中心に—

朴 秀娟 (神戸女学院大学)

1. はじめに

本発表では、アカデミック・ライティング（以下、「AW」とする）、なかでも、図表を提示する際に用いられる述語のテンス・アスペクトに見られる特徴を明らかにすることで、テンス・アスペクトの再学習において上級日本語学習者に必要なものは何かについて論じる。

AWにおける日本語学習者（以下、「学習者」とする）のテンス・アスペクトの使用に見られる誤用には、次のように、図表の提示におけるものが少なからず観察される。（例1、2は、学習者が執筆した論文の草稿より抜粋したものである。括弧内の矢印先に正用例を示す。）

(1) 表1は先行研究による婉曲用法の下位分類を*示す（→示した）ものである。

(2) 以上の学習支援の内容をまとめると表12のように*なっている（→なる）。

図表の提示で用いられる述語のテンス・アスペクトだからと言って特殊な意味・用法をもつわけではなく、基本的には初級で学ぶテンス・アスペクトの意味・用法でカバーできるものである¹。このような誤用が見られる背景には、AWにおいて、図表の提示におけるテンス・アスペクトの選択には一定のルールが存在しており、学習者がそれを十分に理解・学習できていないことがあるように思われる。そこで、本発表では、AWにおいて図表の提示を行っている文を対象に以下の2点を明らかにし、従来のAWにおけるテンス・アスペクトの指導において不足している点は何か、また、AWスキルを必要とする上級学習者にとって再学習が必要なテンス・アスペクトとはどのようなものであるかについて考察する。

①図表の提示で用いられる文型・表現にはどのようなものがあるのか。

②図表の提示に用いられる述語のテンス・アスペクトにはどのような特徴があるのか。

2. アカデミック・ライティングで用いられる述語のテンス・アスペクトに関する従来の指摘

AWにおける学習者のテンス・アスペクトの誤用については、これまでも多くの研究において指摘がある（高梨 2013、高梨ほか 2017、板井 2021・2022、近藤・小西 2024 など）。一方、AWにおけるテンス・アスペクトに見られる特徴については、先行研究を引用する際の引用文におけるテンス・アスペクトの用いられ方に関する考察（清水 2010）、生理学のレポートで用いられる述語のテンス・アスペクトの傾向についての調査（石黒 2012）はあるものの、図表の提示に焦点を当てた研究は見当たらない。

AW教材で「図表の提示」が取り上げられることもあるが、図表を提示する際の文型・表現が含む述語のテンス・アスペクトについては十分に記述されていない。12種の教材のうち、図表の提示に関する項目を設けているのは5種のみで、具体的な文型・表現を取り上げているものに絞ると、表1に示す4種に過ぎない²。表1は、AW教材において提示されていた、図表を提示する際に用いられる文型・表現、及び説明をまとめたものである。

¹ 初級では、完成相非過去形であるスルに対して、〈過去〉、〈完了〉を表すシタ、〈動作継続／進行中〉〈結果継続／結果残存〉を表すシテイルが導入される（初級で導入されるテンス・アスペクトの詳細については庵ほか 2000 を参照）。

² AW教材の出典の詳細については、本パネルセッションの趣旨説明の頁を参照されたい。

表1. アカデミック・ライティング教材における「図表の提示」

浜田ほか 1997	表現	(1) ~を [図～・表～] に [示す・まとめる・表す] (2) [図～・表～] は~を [示した・表した] ものである ~を [示した・表した] ものが [図～・表～] である (3) ~を [図・表] にした [(図～)・(表～)]
	説明	なし
二通ほか 2009	表現	A 1. [図/表] に <u>図/表の主題</u> を示す。 B 1. [図/表] は <u>図/表の主題</u> を示している。 2. [図/表] は <u>図/表の主題</u> を示したものである。 3. [図/表] は <u>図/表の主題</u> である。
	説明	何についての図/表かを明示する。A の表現は筆者が図/表に何を示すかを述べる場合に用いる。B は図/表が何を示しているか、あるいは何であるかを述べる場合に用いる。(p.96)
アカデミック・ ジャパニーズ研究会 2015b	表現	【本文】・図Aに…Nを示す。 ・図Aは…Nを示したものである。 【文型・表現】①図Aに…Nを示す。 ②…Nを図Aに示す。 ③図Aは…Nを示している/示したものである。
	説明	【文型・表現】にのみ説明あり： (1) ①～③は、図 (figure) や表 (table) を提示して説明する時、最初によく使われる文型である。図表の提示は、本論の中で、筆者自身が行った調査や実験の方法や結果を示す場合や、既に公表されているデータを借用して論じる場合に行われる。(中略) (2) ①、②は、筆者が自分で図表を作成した場合にのみ用いる。したがって、筆者が行った調査や実験の結果を示す場合には、①、②がよく使われる。 (3) ③は図表を自作した場合でも他から借りた場合でも使うことができる。 (p.78)
伊集・高野 2020	表現	・(図1/表1) は (図表のタイトル) を示している/表している ・(図1/表1) は (図表のタイトル) を示したものである ・(図1/表1) に (図表のタイトル) を示す
	説明	なし

いずれの教材も、図表を提示する際に用いられる文型・表現の羅列が中心となっている。また、以下の3つは、ほとんどの教材において共通して取り上げられている。

- (3) 図/表に [図/表の主題] を示す。
図/表は [図/表の主題] を示している。
図/表は [図/表の主題] を示したものである。

文法的な側面については特に言及されておらず、筆者が自ら作成した図表の提示なのか、他から借用してきた図表の提示なのかによって使える文型・表現が異なることが説明されているのみである。しかし、その観点では(1)(2)に示したような誤用を説明することができない。図表の提示に用いられる文型・表現を適切に産出できるようになるためには、文型・表現そのものの学習だけでなく、テンス・アスペクトに関する学習も必要である。

3. 調査方法

本考察では、人文・社会科学分野において書かれた学術論文を対象に、図表の提示が行われている箇所を抽出して分析を行う。具体的には、『日本大百科全書(ニッポニカ)』(ジャパナレッジ版)の「日本のおもな学会・協会」リストにある人文・社会科学分野([文学、哲学、教育学、心理学、社会学、史学][法律学、政治学][経済学、商学・経緯学])の学会から、会員数が多い上位10学会を選別した³。そして、それぞれの学会が刊行する学会誌のうち、2024年

³ 調査対象となる学術論文の選定方法は、清水(2010)を参考にしている。

9月時点でオープンアクセスが可能であった8つの学会誌に、『日本語の研究』（日本語学会）、『日本語文法』（日本語文法学会）の2誌を加えた計10誌から、図表が掲載されていた最新の論文10本ずつ（計100本）を対象にデータを収集した⁴。その結果、得られたデータ数を表2に示す。なお、同一の図表が論文の中で複数回提示されることがあるが、当該の図表を初めて言及した箇所のみを考察対象としている。

表2. 「図表の提示」の用例数

『雑誌名』（学会名）	用例数
『心理学研究』（日本心理学会）	61
『教育心理学研究』（日本教育心理学会）	69
『体育学研究』（日本体育学会）	74
『保育学研究』（日本保育学会）	46
『特殊教育学研究』（日本特殊教育学会）	54
『日本語教育』（日本語教育学会）	49
『社会学評論』（日本社会学会）	32
『現代経済学の潮流』（日本経済学会）	61
『日本語の研究』（日本語学会）	56
『日本語研究』（日本語文法学会）	35
合計	537

4. 結果と考察

4.1 図表の提示に用いられる文型・表現

図表の提示に用いられる文型・表現は、大きく、図表を「提示する」という意味の述語を明示的に含むものとそうでないものの二つに分けられる。前者を〈述語明示型〉、後者を〈述語非明示型〉と呼ぶこととする。〈述語非明示型〉には、「提示する」という意味の述語は含んでいないものの文中において説明的に使われているもの（タイプA）と、単に、節末や文末に位置する括弧内に提示するだけに留められているもの（タイプB）の2タイプがある。以下に、それぞれの例を示す。

〈述語明示型〉

- (4) 項目、因子負荷量および下位尺度の α 係数を **Table 1** に示す。（『心理学研究』95-3）
 (5) **表2** は、算数と理科の国内偏差値、HRの平均値を、移民的背景の有無、移民世代、親の出生地の組み合わせ別に示している。（『社会学評論』74-1）

〈述語非明示型：タイプA〉

- (6) 対象者及び授業担当教師の詳細と実施期間は、**表1** の通りである。（『体育学研究』69）

〈述語非明示型：タイプB〉

- (7) 次に、漢字書字成績と学力・資格情報処理の関係を検討するために、ピアソンの積率相関係数を算出した (**Table2, Table3**)。（『特殊教育学研究』61-3）

上記の型について、学会誌ごとに出現傾向を示すと表3ようになる。少数ながら、どの型にも入らなかったもの(11例)、文中で図表を言及することなく図表を提示していたもの(3例)があったため、それらは「その他」として分類した⁵。なお、表中の百分率は、最下段の「合計」を除き、各学会誌において各型が占めていた割合である。

⁴ 一つの学会で複数の学会誌が刊行されていた場合は、和文の学術雑誌を調査対象とした。また、執筆者が学習者であると思われた論文、特集論文は考察対象から除外している。

⁵ どの型にも入らないと判断したものは次のような例である。「提示する」という意味の述語を含まないという点では〈述語非明示型：タイプA〉と共通しているが、(6)のように、「～のとおり」「～のように」のような表現を用いて図表が取り立てられているもののみを〈述語非明示型：タイプA〉とした。

・益岡（2008）は、属性には**表1**の4つの種類があると指摘する。（『日本語文法』23-1）

表 3. 学会誌ごとに見る「図表の提示」の型

学会誌	型	述語 明示型	述語非明示型		その他	合計
			A	B		
『心理学研究』		16 (26.2%)	0 (0%)	44 (72.1%)	1 (1.7%)	61 (100%)
『教育心理学研究』		29 (42.0%)	1 (1.5%)	39 (56.5%)	0 (0%)	69 (100%)
『体育学研究』		30 (40.6%)	8 (10.8%)	36 (48.6%)	0 (0.0%)	74 (100%)
『保育学研究』		13 (28.3%)	2 (4.3%)	31 (67.4%)	0 (0.0%)	46 (100%)
『特殊教育学研究』		33 (61.1%)	0 (0.0%)	21 (38.9%)	0 (0.0%)	54 (100%)
『日本語教育』		21 (42.9%)	7 (14.3%)	17 (34.7%)	4 (8.1%)	49 (100%)
『社会学評論』		12 (37.5%)	10 (31.2%)	6 (18.8%)	4 (12.5%)	32 (100%)
『現代経済学の潮流』		43 (70.5%)	13 (21.3%)	3 (4.9%)	2 (3.3%)	61 (100%)
『日本語研究』		38 (67.8%)	15 (26.8%)	2 (3.6%)	1 (1.8%)	56 (100%)
『日本語の文法』		27 (77.1%)	6 (17.2%)	0 (0.0%)	2 (5.7%)	35 (100%)
合計		262 (48.8%)	62 (11.5%)	199 (37.1%)	14 (2.6%)	537 (100%)

同じ人文・社会科学分野であっても、〈述語非明示型〉、なかでも、節末や文末の括弧内に図表を提示するタイプBを好む分野（『心理学研究』『教育心理学研究』『体育学研究』『保育学研究』）と、〈述語明示型〉を好む分野（『特殊教育学研究』『現代経済学の潮流』『日本語研究』『日本語の文法』）がある。全体的には、〈述語明示型〉と〈述語非明示型〉が約半々ぐらいの割合で用いられていた。次節では、このうち、〈述語明示型〉の262例に見られたテンス・アスペクトの傾向について述べる。

4.2 図表の提示に用いられる述語のテンス・アスペクト

〈述語明示型〉を、文型・表現の構造によって分類すると、表4のようなになる。Xは図表のタイトルや内容を表し、Vは述語（「図表の提示」では動詞）を表す。

表 4. 「図表の提示」における〈述語明示型〉の文型・表現

「図・表にV」類	「Xを図・表にV」「Xは図・表にVとおりである」 「図・表にVように、」 「図・表にVとおり、」 「図・表にV-NP」
「図・表はV」類	「図・表はXをV」「図・表はXをVものである」
その他	「XをV [の・もの] が図・表である」「Xは図・表のようにV」 「(Xのために) 図・表をV」「XをV図・表」

これらを多く見られた順に、動詞（V）の内訳及びテンス・アスペクトを示したものが表5である。最も用いられていた上位3位の文型・表現は、「Xを図・表にV」「図・表はXをV」「図・表はXをVものである」であった。いずれも、AW教材において共通して取り上げられる傾向にあった文型・表現である。動詞は、「示す」が動詞全体の約8割を占めている（262例のうち、211例）。テンス・アスペクトは、「図・表はXをV」ではシテイル形のみが、「図・表はXをVものである」ではシタ形のみが用いられている。「図・表はXをV」「図・表はXをVもであ

る」については、AW 教材で挙げられている文型・表現の特徴と一致した結果となった。

表 5. 〈述語明示型〉の文型・表現に用いられていた動詞及びテンス・アスペクト

文型・表現	項目	数	動詞 (出現数)	テンス・アスペクト				
				スル	シタ	シテイル	シテイタ	その他
X を <u>図・表</u> に V		159	示す (142)、まとめる (8)、挙げる (3)、表す・整理する・分類する・対比する・引用する・記す (1)	104	40	14	0	1 ⁶
<u>図・表</u> は X を V		37	示す (35)、表す (2)	0	0	37	0	0
<u>図・表</u> は X を V ものである		28	示す (16)、比較する (3)、まとめる (2)、分析を行う・集計する・推測する・推計する・整理する・トレースする・分類する (1)	0	28	0	0	0
X は <u>図・表</u> のように V		14	なる (10)、まとめる (3)、表す (1)	13	0	1	0	0
X は <u>図・表</u> に V とおりである		6	示す (6)	1	5	0	0	0
<u>図・表</u> に V-NP		6	示す (6)	5	1	0	0	0
X を V [の・もの] が <u>図・表</u> である		4	まとめる (2)、示す・図示する (1)	0	4	0	0	0
<u>図・表</u> に V ように、		3	示す (2)、見る (1)	2	1	0	0	0
X を V <u>図・表</u>		2	示す (2)	1	1	0	0	0
(X ために) <u>図・表</u> を V		2	作成する (2)	0	2	0	0	0
<u>図・表</u> に V とおり、		1	示す (1)	1	0	0	0	0

問題は、「X を 図・表 に V」である。最もよく使われているのは、AW 教材で示されている文型・表現と同様にスル形であるが、シタ形、シテイル形の使用も少なからず見られる。シタ形、シテイル形が使用されていた「X を 図・表 に V」の特徴を以下に示す。

まず、シタ形については、特定分野、特に、自然科学系の分野によく見られる実験や調査の統計分析の報告を中心とした論文に多いという特徴がある。39 例のうち 23 例が、『心理学研究』『教育心理学研究』『体育学研究』『保育学研究』『特殊教育研究』の 5 誌に収録されている論文からであった。これら 5 誌には、実験や調査の統計分析を述べた論文が多く収録されている。生理学のレポートを対象に文末の述語のテンス・アスペクトの使用傾向を調べた石黒 (2012) では、「結果」の章では、シタ形の使用が多く、「文章中のほかの箇所をメタ的に参照・指示・言及する述語」(図表の参照を含む)である「参照述語」のシタ形の使用も多いことが述べられている。今回の調査でも、23 例のうち 20 例は、(8) のような、「結果」の章で統計分析の結果を述べているものであった⁷。いずれもシタ形の連続で結果が述べられている中で現れていた。人文・社会科学系の論文が自然科学系の論文に関わらず、実験や調査の統計分析の結果を順に「淡々と」報告するタイプのテキストでは、シタ形が好まれる傾向にあると言える。

(8) UUT を実施したサンプル(n=316)に対して、メタ創造性と創造性(流暢性、柔軟性、独創性)の相関係数を、RAT を実施したサンプル(n=339)に対して、メタ創造性と創造性(正答数)の相関係数をそれぞれ算出した。また、メタ創造性と創造性課題の取り組み時間(対

⁶ シテイル形を用いていた例である。

⁷ 残りの 3 例は、「方法」の章で、調査項目や協力者の属性をまとめた図表を提示しているシタ形であった。

数変換したものの相関係数も算出した。結果を Table2 に示した。(『教育心理学研究』72-1)

これら5誌以外で見られたシタ形の使用には、例9、10のように、結果の提示に先行する調査や分析に関わる述語が同一文中において示されているという特徴があった。このような例では、図表の提示を表す述語(波線部)をスル形にすると、前後の流れにおいて不自然な文になると思われる。このような例はスル形の用例には見られない⁸。中止形で示されているのは、すでに完了している調査や分析を示すものであり、そのことが主文のテンスで示されることとなる。

(9) 節の種類による差異も検討する。各地域で使用される節が異なるので、単純な比較が難しいが、三尾(1942)で丁寧語の使用率が高かったガ節・ケレド節について、聞き手配慮指数を調査し表4に示した。(『日本語文法』23-1)

(10) 最後に、高校ランク・学科について、高卒後教育内部の差異(本人学歴や大学学校歴・学科)を条件づけた効果(仮説1c、仮説2b)を確認する。サンプルを高卒後教育進学層に限定し、以下の4つのモデル——(A)5.2で用いたモデル、(中略)(D)Cに大学学科を追加——を検討し、推定結果を表3に示した。(『社会学評論』74-1)

次に、「Xを図・表にV」に用いられていたシテイル形について述べる。シテイル形には、スル形への言い換えが可能なものと(例11)、そうでないもの(例12)があった。それまでの記述と関連した内容に基づく図表の提示や、まとめとしての図表の提示に用いられるシテイル形はスル形に言い換えることができる。一方、図表が「には」や「では」で取り立てられているシテイル形はスル形に言い換えることができない。

(11) 新体力テストの結果より、各測定項目の評価基準(文部科学省、1999)に従って体力の得点合計(以下「体力総合得点」と略す)を算出するとともに、新体力テストの総合評価区分(文部科学省、1999)によって対象者の体力水準を評価し、5評価群(A群—E群)に区分した。各群における対象者の身体的特性を表1に示している。(『体育学研

(12) 女性の労働市場における活躍と、男性の家庭における活躍は表裏一体だ。伝統的な性別役割分業意識の下では、女性は家庭で育児・家事において大きな責任を担うことが期待されており、これが男女間賃金格差の大きな原因ではないかとKleven et al.(2019)は指摘している。図3-5には、男性に対する女性の家事・育児時間の比をG7の国々とOECD平均について示している。OECD平均を見ると、女性は男性の1.93倍の家事・育児時間だ。(『現代経済学の潮流』2023)

以上、AWで図表を提示する際に用いられる文型・表現の特徴について述べてきたが、述語のテンス・アスペクトにバリエーションが見られる文型・表現と、テンス・アスペクトが固定された形でしか用いられない文型・表現の間には違いが見られる。主体(=書き手)の存在が含意されるかどうかの違いがある。「Xを図・表にV」の使用には、文字として明記はされないものの、図表を提示する主体(=書き手)の存在が含意されており、そのため、テキストの流れに応じて、述語のテンス・アスペクトが多様に選択されうるのだと考えられる⁹。一方、「図・表はXをV」「図・表はXをVものである」では、主体(=書き手)の存在が含意されない。述

⁸ 次のように、図表にまとめる際に施した手順が中止形で示されている例は見られる。

・両方のグループから出た項目を合わせ、教師の知識分類(Shuman, 1987)を参考にレベル別に並べた概要を図1に示す。(『日本語教育』181)

⁹ 〈述語明示型〉のその他の文型・表現についても、述語のテンス・アスペクトにバリエーションが見られるのは、図表を提示する主体(=書き手)が含意される文型・表現である。

語は図表が何であるかを説明するものであり、テンス・アスペクトは、主文末ではシテイル形が、従属文（名詞節）ではシタ形が用いられる。

5. 上級日本語学習者にとって再学習が必要なテンス・アスペクト

AWで図表の提示に使われていた文型・表現の多く（262例のうち224例、全体の約85%）は、AW教材で示されているものであった（「Xを図・表にV」「図・表はXをV」「図・表はXをVものである」）。その中で、「図・表はXをV」「図・表はXをVものである」は、述語のテンス・アスペクトが固定された形で使用されており、これら二つについては、学習者が、それぞれシテイル形、シタ形の述語が用いられる文型・表現であると意識して学習すれば、(1)のような誤用は生じないと思われる。述語のテンス・アスペクトにバリエーションが見られていた「Xを図・表にV」は、スル形の使用が最も多かったが、特定の分野や、先行する調査や分析を完了したものとして同一文中で表す必要があるときはシタ形が、前後の記述との関連付けや、図表の取り立てが行われているときはシテイル形が用いられることもあった。なお、AW教材で述べられていた、筆者が自ら作成した図表の提示なのか、他から借用してきた図表の提示なのかによる、文型・表現の選択の差異は見られていない。述語のテンス・アスペクトの選択に影響を与えていたのは、図表を提示する主体の存在が暗示される文型・表現であった。

これらを踏まえ、上級学習者が、図表の提示に用いられる文型・表現を適切に産出できるようになるためには、文型・表現そのものだけでなく、①図表の提示に用いられる述語のテンス・アスペクト、②テキストの流れを意識したテンス・アスペクトの選択、③図表を提示する主体の存在有無の3点をも意識した学習が必要であることを提案したい。

6. おわりに

本発表では、上級学習者に必要な初級文法項目として、図表の提示に用いられる述語のテンス・アスペクトを取り上げた。AWでテンス・アスペクトを適切に産出できるようになるためには、テンス・アスペクトがもつテキスト的機能（工藤1995）を意識した学習が必要であると思われる。テキスト的機能を中心とした詳細な考察は今後の課題とする。

【引用文献】

- 庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
- 板井美佐（2021）「中国人上級日本語学習者の博士論文における誤用の傾向・要因と指導方法—中国語を母語とする大学院生の調査から—」『城西国際大学大学院紀要』24, pp. 1-23.
- （2022）「博士後期課程中国人日本語学習者の博士論文草稿に現れた誤用の傾向・要因と指導方法—コロケーション、呼応表現、は／が、動詞、形容詞に焦点を当てて—」『城西国際大学大学院紀要』25, pp. 127-148.
- 石黒圭（2012）「生理学のレポートに見られる文末の述語のテンスとアスペクトの使用傾向」『第14回 専門日本語教育学会研究討論会誌』, pp. 17-18.
- 工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房
- 近藤智子・小西円（2024）「上級日本語学習者の小論文に見られる問題—テキストの観点をもつ必要性—」『東京学芸大学紀要 機構』75, pp. 11-24.
- 清水まさ子（2010）「先行研究を引用する際の引用文の文末表現—テンス・アスペクト的な観点からの一考察」『日本語教育』147, pp. 52-66.
- 高梨信乃（2013）「大学・大学院留学生の文章表現における文法の問題—動詞のテイル形を例に—」『神戸大学留学生センター紀要』19, pp. 23-41.
- 高梨信乃・齊藤美穂・朴秀娟・太田陽子・庵功雄（2017）「上級日本語学習者に見られる文法の問題—修士論文の草稿を例に—」『阪大日本語研究』29, pp. 159-185.

【付記】本研究は、JSPS 科研費 22K00638 の助成を一部受けています。